

本人が物語風に綴る闘病記

44歳で甲状腺がんと中咽頭がんが見つかりましたが、
中2の娘が「大したことないやん」と言うので。

著：原 利彦（1972年 生まれ）



甲状腺がん治療&中咽頭がん経過観察 編 066：風邪をひいているくらいに思いたい。

2017年8月15日（火） 治療終了から57日目 退院から36日目

トモは日々、色んな『おくすりごはん』を作ってくれます。野菜やキノコ類が中心です。トキは口内炎が、ほぼ完治して、味覚も50%近くまで回復しているような気がしていました。しかし、それ以外の諸々の副作用に何ら変化はありません。トキは時々、『辛い』と、トモに愚痴をこぼします。トモは少しため息をついて、こう言いました。



「家族としては・・・『風邪』をひいているくらいに思いたい」

トキは、その言葉に腹を立てて、トモに言いました。「僕の病気は『風邪』じゃない、『がん』なんだ！」

トモは何も言いませんでした。『がん』で辛いと言われては、言い返せるはずもありません。

この時、トキは初めて『あること』に気付きました。

トモは母親を『がん』で亡くしています。病院に看病に通った話も、トキは聞いて知っていました。その上で、自分の『がん』については「出来るだけ周囲の人たちに言わないように」と、トモには伝えていました。家族ぐるみでお付き合いのある友人から、「旦那さん、元気になっている？」と聞かれても「うん」と嘘をついてもらっていたのです。

つまり、トキは、トモに「辛い」と言えますが、トモは誰にも「辛い」と言えないのです。

トキは今頃になって、このことに気付きましたが、トモにかける言葉は見つけることが出来ませんでした。

⇒ 067：治療は終わった、がんは治ったのだ！